Osaka University Knowledge Archive

Title	日本語におけるスタイル切り替えの習得段階 : ブラジル人就労者の例
Author(s)	ナカミズ, エレン
Citation	阪大日本語研究. 1997, 9, p. 77-94
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9434
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『阪大日本語研究』9（1997）

日本語におけるスタイル切り替えの習得段階
― ブラジル人就労者の例 ―
Stages of Style Shifting Acquisition in Japanese
- The Case of Brazilian Guest Workers -

エレン・ナカミズ
Ellen NAKAMIZU

キーワード：自然習得，学習，普通体・丁寧体，方言・標準語

1. はじめに

これまでの日本語習得に関する研究は主に教室での学習を重視したものが多くなされてきたが、自然習得に焦点を当てた研究はまだ初歩の段階にあり、最近になってその必要性が指摘されるようになった。

本研究は在住ブラジル人就労者を対象とし、とりわけ自然習得でのインプットが既に進だ時点で学習を受けはじめた人の日本語習得過程の諸側面を明らかにしたい。その中で、今回の課題になるのはスタイル切り替えの習得ということである。

教室内で正式な学習を受けた学習者はフォーマルなスタイル（丁寧体など）を先に身につけ、「普通体」を含むよりインフォーマルなスタイルへの切り替えを習得していくが、その経過は容易なものだとは言えない。来日する多くの留学生はそのケースに当てはまるであろう。それに対して、本稿で対象とするブラジル人就労者は逆の日本語習得の過程を経ると思われる。すなわち、職場での自然習得が先立ち、しばらくしてからボランティア団体が営む日本語教室で含む学習を受けることになるため、インフォーマルなスタイルに接した後、フォーマルなスタイルを含む習得すること

になるのである。さらに、ブラジル人にとってこのようなボランティアの人々は「職場外」の日本社会との唯一のつながりになるが、彼らが話す日本語のバラエティは職場でのバラティとの相違点が多い。そのスタイルと接する期間が長くなるにつれ、「職場内」と「職場外」、それぞれのスタイルに対する意識が形成され、それぞれを使い分けるようになることが観察できる。本稿ではその意識の変容及び実際の切り替え習得の過程の一側面を明らかにしたいと思う。

2. 先行研究

本稿に関わる先行研究は大きく二つのグループに分けられる。一つは、様々な観点から言語変異を扱ってきた第二言語習得の研究であり、もう一つは日本語習得に関する研究である。まず、第二言語習得における言語変異について述べてみたい。

これまでの第二言語習得研究においては、学習者における言語変異が中心的な研究課題となってきた。70年代は変異の要因として母語の干渉が重視されたが、80年代に入って、社会的心理的な要因から生じた変異も研究の注目を集めるようになった。それらの研究の中でスタイル切り替え(style shifting)を扱うものが増えてきた。代表的なのはLabovパラダイムを応用し、スピーチへの注意とスタイル切り替えとの相互関係を調べたTarone(1985)、Ellis(1987)などが挙げられる。このように心理的な要因を取り上げた研究に対して、社会的な面を考慮に入れたものもあった。Beebe & Zuengler (1983)はアコモデーション理論を基に、中国系タイ人及びヒスパニック系アメリカ人のバイリンガルを対象に、話し相手によってスタイルを切り替えるケースを分析した。彼らが同じ民族の話し相手にアイデンティティ意識を示す方法として、それぞれ、中国語的な発音のタイ語と、スペイン語的な発音の英語を話すと述べた。つまり、話し相手にスタイルを合わせる意識が第二言語を話す時にもあるわけである。すなわち、母語話者と同様に、学習者の第二言語にも複数のスタイルが存在し得るこ

とがわかる。

一方、日本語習得についてなされてきた研究には一つの共通点が見られる。それは、教室内での正式な学習を受けてから自然な環境で日本語を使用するようになった人を分析の対象としたものが圧倒的に多いということである。最近まで日本語を習得した人は留学生あるいはビジネスマンや外交官に限られており、ほとんどすべてのケースでは教室が学習の出発点であった。しかし、現在の動向を観察すると、日本で生活しながら日本語を自然習得した後に正式な学習を受ける、という逆の習得順の人が急速に増加していると言えるだろう。その中には、日本人と結婚した配偶者や日本に移住した就労者などの例が目立つ。このような状況の下で、日本語の自然習得の実態に関しても研究をはじめるべき時代がやってきていると思われるが、実際には日本での自然習得研究はまだ軌道に乗っていないというのが実状である[1]。

以上の先行研究を踏まえた上で、本稿では社会言語学的な観点からブラジル人就労者によるスタイル切り替えの習得過程を調べることにする。ただし、スタイル切り替えの要因として、上で取り上げた「スピーチへの注意」(Labov パラダイム)及び「話し相手」(アコモデーション理論) というような最小単位の要因ではなく、話し相手を含む、話者が置かれている場面を中心にブラジル人就労者のスタイル切り替えを考察する必要があると思う。また、スタイル切り替えは話者の、第二言語の様々なバラエティに対する意識と深くかかわっているので、こうした意識も心理的な要因として考察の対象にする。

ここで呼ぶ「場面」は基本的に「職場内」と「職場外」という２つの領域に属している場面である。これまでの調査 (ナカミズ 1994、1995)で得られたデータから述べると、ブラジル人の場合は、「職場内・外」がスタイル切り替えの境目だと思われる。以下、それぞれの領域において、インターアクション場面で使用されている日本語のバラエティについて詳細する。

3. 日本語のインプット：自然習得と正式な学習とのコンフリクト

3.1.「職場内」のインプット

大半のブラジル人が働いている職場は製造工場であり、仕事中の言語的なやりとりは単純命令や単文を相手に投げかけるものであることが多い。また、以下の二つの特徴が「職場内」のいずれのデータにも見られた。

－ 普通体の使用：ブラジル人が普段接している相手は同僚や直接かかわる上司（班長、主任）であるため[2]、普通体の使用が圧倒的に多く、丁寧体への切り替えはほとんど見られない。日本人の同僚や上司はブラジル人に対して普通体を使い、また同じ現場で働く日本人同士でも普通体を使用することが一般的である。

－ 方言の使用：地元の方言（滋賀弁）が広く使用されている。日本人の話し相手はブラジル人に対しても方言を使う。方言を回避する意識は見られないし、ブラジル人話者も方言形式を使用することがある。ここでは、それをブラジル人による言語的なアコモデーションとして扱う。

3.2.「職場外」のインプット

「職場外」においては、ブラジル人が日本人と接する相手はほぼ日本語教室のボランティアメンバーに限られている。ボランティアが使用する日本語はその地域社会で話されている「フォーマルなスピーチスタイル」（真田1996）である。次の点において職場のバラエティと対照的である。

－ 丁寧体の使用：普通体の習得が先立つと思われるが、ボランティアと接すること及びボランティアの教室で正式な学習[3]を受けることによって、自発的に丁寧体を使いはじめ、さらに、「普通体」と「丁寧体」との文体差を意識するようになる。

－ 方言の回避： 標準語が重視され、授業以外の場面でも方言の使用が

回避される。ブラジル人もボランティアの話し相手に対して方言形式を使用しない傾向が見られた。

このように職場で日本語を自然習得してからボランティアの教室で学習及び教室のバラエティを使用しはじめるブラジル人話者はこの２つの異なるバラエティに対する区別の意識が形成され、または場面によってこの２つのバラエティを異なるスタイルのものとして使い分けるようになることがわかった。

以下、職場内の場面と職場外の場面（以下ボランティア場面）に分けて、切り替えを分析する。こうした切り替えは「言語バラエティに対する意識」と「実際の使用」という２つの側面から扱うが、「実際の使用」に関しては特に以下の変項に着目する。

① 普通体・丁寧体の切り替え

② 方言・標準語の切り替え

4. 研究調査の概要

これまではアンケート調査と談話録音調査の、二通りの調査を行ってきた。今回は、談話録音調査のデータを取り上げることにする。なお、縦断的な調査を行っているため、本稿で考察できるのはそのほんの一部である。

ブラジル人話者と日本人話者、双方の属性などの情報は表1から表4までにまとめた。

表1: ブラジル人話者の属性

	性別	年齢	父	母
BI	男	33	準一世	二世
BA	男	24	非日系	準一世

＊ 準一世: 学校教育を受ける前に移民した人

表2: 来日以前の日本語能力

	会話	聴解	正式学習
BI	×	△	×
BA	×	×	×

× = ぜんぜんできない
△ = 少しできる
○ = よくできる

表3: 来日後の日本語使用状況

	日本滞在期間	正式学習	職場内	職場外
BI	1年8ヶ月	5ヶ月	上司	ボランティア
BA	4年9ヶ月	1年6ヶ月	同僚	テレビ（聴く

表4: 日本人話者の属性

	性別	年齢	居住地	出身地	ブラジル人との関係
JO	女	30代	草津市	九州	ボランティア
JY	男	37	草津市	滋賀県	ボランティア
JK	女	21	草津市	滋賀県	ボランティア
JH	男	30代	草津市	滋賀県	上司（班長）
JC	男	20代	草津市	滋賀県	同僚

ブラジル人話者（以下BIとBA）２名が参加した「職場内」の場面と「職場外」の場面（ボランティア場面）においての20分程の会話を録音し、インフォーマントがそれぞれの会話で使用したスタイルに焦点を当て、切り替えのプロセスを分析した。

分析の対象となった各々の会話とその参加者、また会話が行われた段階が表５に示されている。

表5: 各場面の参加者

	録音段階	職場内	ボランティア
BI	第1回(96/4)		BI-JO(1)
	第2回(96/7)	BI-JH; BI-JC	BI-JY
	第3回(96/12)		BI-JO(2)
BA	第1回(96/4)	BA-JH	BA-JK

会話録音の第１回目でのブラジル人話者の日本滞在期間とボランティアと接している期間（学習期間）を、それぞれ表３に表示した。

5.「普通体」と「丁寧体」の切り替え

「職場領域対ボランティア領域」という大きな枠を作り、その２つの間に「普通体」と「丁寧体」の切り替えに関してどのような差があるかを調べた。さらに、各々の領域の中で見られるスタイル切り替えのパターンも明らかにした。

図1と図2は２つの領域に分けたすべての場面における「普通体」・「丁寧体」の使用頻度を対照的に示している。

図１
BA話者　各場面における普通体・丁寧体の使用頻度

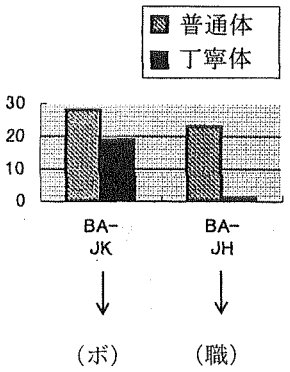
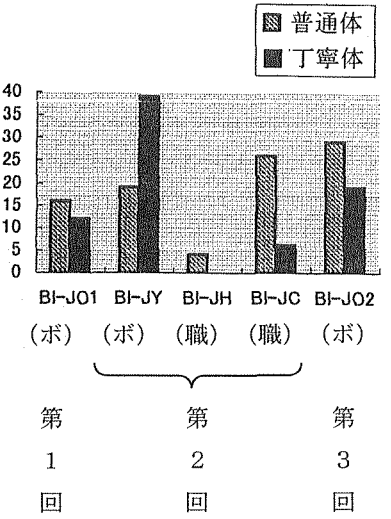


図２
BI話者　各場面における「普通体」・「丁寧体」の使用頻度



＊ボ＝ボランティア；職＝職場

これらのデータは全体の発話ではなく、各会話の質問・応答ペアーに限

定されている。縦の数字はそれらのペアーの中でブラジル人話者が発した質問と応答の発話数を合わせたものである[4]。質問・応答ペアーに限定した理由は、話し相手に顔を向けて直接ものを尋ねたり、答えたりする時は、丁寧さを意識する傾向が増えると思われるからである。

5.1. 「職場内」の場面における切り替え

「職場内・外」を線引きに切り替えの２つのパターンが見えてくる。職場内において、同僚(JC)と会話をする場面と上司に当たる班長(JH)と会話をする場面があり、その２つの場面の間に「丁寧体」・「普通体」の切り替えに関しては注目されるほどの差が出ないことがわかった。丁寧体より普通体の使用頻度がはるかに多い。その理由は次のように考えられる。

日本人の同僚や上司がブラジル人に対して普通体を用い、職場内では「普通体」のインプットが多量である。それに合わせてブラジル人話者も普通体を多く使用するようになる。すなわち、話し相手によって、スタイルを切り替えようとする意識が弱いのであろう。また、インフォーマントは直接かかわる班長や主任以外の上司（部長など）とはほとんど接することがないため、スタイルを切り替える必要性を感じないことも確認できる。ここから、職場内では自発的なスタイルの切り替えよりも相手のスタイルへのアコモデーションが行われているのではないかと思われる。

ボランティアとの付き合い及び学習が長くなるにつれ、職場内でも「丁寧体」の使用が多くなるかと予想されるが、これまで観察した限り、学習が職場でのブラジル人の言語行動に関与している度合いは高くないとみなされる。

5.2. 「職場外（ボランティア）」の場面における切り替え

一方、ボランティアと会話をするいくつかの場面には一つの共通点が見られる。それは、「丁寧体」の使用頻度が、職場での場面のそれと比べ、高いということである。

ここで、BI話者に注目したい。データがまだ少ないものの、ボランティ

ア場面では、話し相手によって「普通体」・「丁寧体」を待遇表現として使い分ける傾向が見られる。

BIがボランティアの日本語教室に通いはじめ、５ヶ月がたった時点で最初の談話録音を実施した。三つの段階に分けて、ボランティア相手のJOとJYと会話をする場面を設定した。最初に収集したデータはJOとの会話であり、その２ヶ月後JYとの会話を録音した。さらに、６ヶ月後JOと再び会話をする場面を設けた。JOの会話より2ヶ月後に行われたJYとの会話では「丁寧体」の出現が急増したため、ボランティアの日本語教室での学習期間の長さがそうした現象を起こしていることが考えられた。ただし、第３回のJOとの会話では普通体の使用頻度がまた多くなる傾向が見られ、最初のBI-JO(1)とは大きな差はなかった。JYは関西弁を交えたインフォーマルなスタイルで話したが、BIはそれにアコモデーションする意識がなかった。このことから、職場の場面と異なり、ボランティア場面では話し相手による切り替えがあるものと考えられる。

こうした話し相手による「普通体」と「丁寧体」との切り替えに最も関与している要因を探るために、インフォーマントへのフォローアップインタービューを行った。BIによると、JYよりもJOの方が話しやすく、緊張感がないという。JYと話した時は、丁寧に話そうとする意識が働いていたそうである。BIの立場から見ると、JOとJY、双方との親疎関係はほぼ同じである。双方とも同じボランティア団体の、挨拶を交わす程度の顔見知りの人であったので、親疎関係よりも話し相手との心理的な距離がJIが選択したスタイルに反映している要因だと思われる。それに対して、職場では上司よりも同僚の方が親しいものの、どちらを相手にした場合も「丁寧体」の使用がほとんど見られないというのは、「普通体」の使用が「職場」全体の環境にふさわしいと思っており、普段接している各々の話し相手との距離という要因が関与する度合いが弱いことになるのであろう。

BAが参加するボランティア場面と職場場面は一つずつであるため、今回は共時的な分析しかできない。ボランティア相手のJKに対して、「丁寧体」の使用頻度が高いことが見られたが、同時期に録音したJH（班長）と

の会話では「普通体」のみを用いている。BAの場合も、JHが上司であるにもかかわらず、言語形式には上下関係が見られない。

BIとBA、いずれの場合も、「普通体」と「丁寧体」の切り替えに関して同様の傾向が見られると言ってもよいであろう。職場外のボランティア場面では切り替えが行われ、こうした切り替えをする能力がボランティア場面からのインプットによって発達していると思われる。しかし、学習期間が長くなっても、「職場内」での切り替えには影響がまだ大きくないこともわかった。

6. 方言と標準語の切り替え

ブラジル人話者によるスタイル切り替えは方言使用とも深くかかわっていることが観察できた。

方言と標準語の使い分けに関しても、上述した言語的なアコモデーションが見られた。職場内において方言のインプットが多く、自分でも使用することがあるのに対して、職場外ではなるべく回避しようという意識が働いているようである。フォローアップインタービューで尋ねたところ、習得の早い段階から職場で使用される方言形式と、テレビでインプットとして得る標準語的なバラエティとの違いに気がつき、ボランティア話者と接してから、さらにその意識が強まったとの内省が得られた。こうした意識により、自分から切り替えを起こすようになるが、話者によってこのような切り替えは中間言語的な段階に留まる場合がある。

本節では、否定辞の「ナイ」とそれに相当する関西方言の「ヘン」、また文末助詞の「ネ」とその関西方言の変項「ナ」の切り替え状況を分析の対象とする。前者の「ヘン」は関西方言として認識しやすく、ブラジル人話者は、学習を受ける以前からそれを関西方言の標識として見ていた。一方、「ヘン」と比べ、文末助詞の「ナ」に対する方言意識は薄く、対象とした２名のブラジル人話者は使い分けずに両形式をともに使用している。

6.1. 「ナイ」・「ヘン」の切り替え

ここでも、アコモデーションの現象が起こっていることを確認した。ただし、「普通体」・「丁寧体」との切り替えとは異なるパターンも見られた。まず、それについて述べてみたい。

ボランティアを話し相手にした場面では否定辞の「ヘン」形式が出現しなかったのに対して、「職場内」ではブラジル人話者が「ヘン」を使用している。しかし、「ナイ」の出現頻度は職場内の場面でも「ヘン」のそれよりも高かい。これは、「丁寧体」と異なり、「ナイ」が「職場内」でも用いられており、しかも「ヘン」と混用されているからだと考えられる。つまり、ブラジル人話者は両形式をインプットとして得るわけである。そのため、ブラジル人話者が自発的に「ヘン」形式を使用することも見られた。

(1) BA: ここはさわらなくてもいいし...
JH: 聴取不可能
BA: メニュー。あまりかわらへんから。

(2) JC: うん、つかう。めちゃくちゃつかう。めちゃくちゃつかう。
BI: かまへん↑
JC: なにが＋
BI: あのー、かたくになって

どちらの話者が上のように「ヘン」を積極的に用いていることが見られた。ただし、その出現頻度は高くない。そのことから、「ヘン」の使用は意図的であり、アコモデーションストラテジーとして用いられているのではないかと思う。次の例はこうしたアコモデーションの現象を示すものである。上司による「ヘン」が現れた質問に応じて、ブラジル人話者が同じ形式を使用し、返答する。このようなパターンはBAの発話に何度か観察できた。

(3) JH: これはぜったいこっち, こっちだけ？ここは？
BA: はいらないでしょ。

JH: はいらへん↑
BA: はいらへん。

「ナイ」・「ヘン」の使用状況は次のようにまとめることができる。

表6: 「ナイ」・「ヘン」の使用状況

形式	職場内	職場外
ナイ	○	○
ヘン	○	×

6.2. 「ネ」・「ナ」の中間言語的な用法

否定辞の「ナイ」・「ヘン」の使い分けに関しては切り替えが成功している[6]と言っても良いであろう。ただし、文末助詞「ネ」とそれに相当する関西方言の「ナ」の場合は、同様な切り替えが見られない。ブラジル人話者は「ヘン」を関西方言の標識として認識しているが、「ナ」には同じような特徴づけを行っていない。

話者BIの場合、一回目の談話録音が行われてから、ボランティアの日本語教室で「ナ」と「ネ」におけるスタイルの差について説明され、「ナ」が関西方言であると言われた。それを言われたことによって、「ネ」と「ナ」を使い分けるようになると推測したが、実際にはこうした切り替えが見られなかった。ブラジル人話者にはボランティア場面で方言を回避する意識があるものの、「ナ」は残り続けるのである。ボランティアの教室で「ネ」と「ナ」について説明された後、話者BIが参加するJOとの２回目の会話（段階３）から抽出した実例を見てみよう。

(4) BI: (xxx) いま、ともだちとはなして、あの、にほんは、ほんきでいぬ、いぬだいじにしますな↑（ん）で、まいにちいぬさんぽし、いぬと、いぬのためにさんぽしますね。

例（4）で見られるように、「ナ」と「ネ」が混在しており、BIはそれぞれを異なるスタイルの標識であることに注意していないようである。このように、調査の今の段階では文末助詞の「ネ」と「ナ」は自由変異(free variation)として扱っても良いと思う。

上のような現象には次の原因が働いていると考えられる。「ナイ」・「ヘン」と異なり、「ナ」は命題とかかわらないもので、モダリティ的な役割を果たしているため、その区別に払う注意の程度が弱いであろう。伝達内容を左右するような、命題とかかわる要素に注意が払われやすいということは当然のことと思われる。

また、いずれの場面でも「ナ」の使用頻度が高く、後で見ていくようなポルトガル語からの転移と思われる中間言語的な用法が頻繁に見られた。ここで、本稿の筋から逸脱するかも知れないが、興味深い点なので、その中間言語的な用法にふれることにする[7]。

6.2.2. ポルトガル語の「né」と日本語への転移

ポルトガル語には「né」[nɛ]という談話標識が存在する。これは本来「não é?」という、英語の「tag question isn't it?」と似たような機能を果たしている表現の省略形である。発音と文中の位置は日本語の「ネ」（「ナ」）と類似し、さらに確認要求と同意要求として用いられる点では機能的にも日本語の「ネ」（「ナ」）に近いと言える[8]。

以下、確認要求の「né」と同意要求の「né」の用例を見てみよう。

(6) Você é advogado, né? O que te levou a trabalhar, tentar a vida como operário no Japão?
貴方は弁護士ですね。日本に就労者として働きにいくきっかけは何ですか。

(7) Tá frio hoje, né?
今日は寒いですね。

上記の確認要求及び同意要求の用法は日本語の「ネ」にも見られるが、ポルトガル語の「né」にはこれ以外の用法が存在している。その用法の「né」は、文末だけではなく、句末、節末にも挿入される間投助詞(filler)であり、その場合は、「não é (isn't it)」の意味が空洞化されていると思われる。要するに、ひとまとまりの情報を伝達する句や節の区切りを示す標識として用いられるものであり、この場合の「né」は談話のリズムを成す機能を持っている。このような機能は日本語の「ネ」(「ナ」)にも見られるが、ポルトガル語の「né」には日本語とは異なり、ある種の働きかけの含意があるように思われる。

(8) Naquela época em que eu tinha me formado, é, a perspectiva da minha vida profissional aqui era nula, né. Como você não tem perspectiva profissional, você acaba pensando no dinheiro.
卒業したばかりの時は、キャリアの見込みは全くありませんでした(né)。キャリアの見込みがなかったら、お金のことを考えてしまいます。

(9) Veja, agora que nós estamos falando sobre educação, estou lembrando o seguinte: nós somos casados e não temos filhos, né. Então lembrei a história de um senhor(....)
教育の話をしたら、次のことを思い出しました。私たちは結婚していますが、子供はいません(né)。それで、ある人のことを...

このためブラジル人のこうした「né」の転移による中間言語的な用法が見られ、「ネ」・「ナ」の過剰一般化が生じるのではないかと思う。次のような実例があった。

(10a) BI: プリンじょうず。
JY: ん、プリンね。

BI: あの、ドミニカりょうりもありますな（ん）。あのひと（ん）（「ドミカ料理がある」という新情報を話し相手に伝えている）

JY: ん。Kさんね。ええ、KTさん。

(11a) JO: ええ、えとね、あのね、にしのほう、オレゴンとカリフォルニアはいきました。

BI: カリフォルニアはきれいな↑（話者はカリフォルニアに行ったことがない）

JO: ん、きれい。サンフランシスコとかロザンセレスとか

インフォーマントに以上の例をポルトガル語に訳させてみると、「né」が同じ位置に出現した。

(10b) Também vai ter comida dominicana, né. Aquela menina...

(11b) A Califórnia é bonita, né.

発音上は、「ネ」も現れるものの、「ナ」の方が多く出現している。これは、関西方言の影響と考えられる。話者は談話録音調査のこれまでの段階で「ネ」と「ナ」を別語形だとは認識していない。すなわち、「ナ」に対する方言形意識は見られない。。

表7はBIとBAが参加したそれぞれの場面で出現した「ネ」・「ナ」とその機能を示している。

表7: ブラジル人の発話における「ネ」。「ナ」の機能

ネ・ナの　機能		I-JO(1)	I-H	I-C	I-O(2)	A-H	A-K
間投助詞	文頭			1			
	文中	9	1		2	1	1
	文末	2	3			2	2
確認要求文末助詞		1			1		1
同意要求文末助詞		5	2	3	8		5
独り言の文末助詞		1	3	4	2		3
転移による　ネ・ナ		4	2		2		2

ボランティアを話し相手に日本語を使用する場面が増えるにつれ、「ナ」・「ネ」をスタイルとして切り替えるようになるか、また切り替えが成立しなくても、「職場内」、「職場外」のいずれの場面でも「ナ」が減少し、「ネ」が増加するかを調べる必要がある。それらの可能性があり得るが、それを明らかにするためには縦断的な調査が欠かせないものだと思われる。

7. おわりに

ブラジル人話者は習得の早い段階から「職場内」と「職場外」の、それぞれの異なるスタイルに気づき、自分からも積極的にスタイルを切り替えるようになることがわかった。こうした切り替えは主に「普通体」と「丁寧体」及び「標準語形式」と「方言形式」の、双方の使用パターンに現れた。その切り替えのプロセスには話者がそれぞれのバラエティに対する意識が潜んでおり、その意識はボランティア場面からのインプットが多くなるにつれ、変容していくと思われる。

切り替えのパターンは最終的に日本語母語話者のそれに似てくるのではないかと予測される。ただし、全ての話者が必ずしも同じような習得パターンを示すとは限らない。その切り替えはどの段階まで進むかは話者によって、また言語形式によって異なると考えられ、文末助詞の「ネ」・「ナ」の場合で見られたように、中間言語的な段階に留まることがある。各話者の切り替え習得・状況を正確に把握するためには縦断的な調査の継続が不可欠なものだと思う。

注

(1)外国人就労者の受け入れの歴史がより長いドイツなどのヨーロッパ諸国では自然習得の研究が70年代から盛んである。日本に定住する外国人就労者が日本語を習得する実態とドイツのそれとの間には多くの共通点があると思われる。本稿を書くにあたっては、特にドイツの外国人就労者におけるドイツ語習得(Zweitsprach-

enerwerb italienischerund spanischer Arbeiter)に関する研究プロジェクトの報告(Meisel,1981 ; Perdue, 1993)が大きな参考になった。
(2)班長や主任より上の上司（部長など）とは接する機会がほとんどないので、職場内では「普通体」と「丁寧体」を切り替える能力が発達しないであろう。むしろ、職場内では切り替えの必要性がないと言っても良いのではないかと思う。
(3)ボランティア団体が営む日本語教室が大学や他の教育機関の日本語教室とは異なる性質を持っていることはいうまでもない。しかし、教師と教科書を通じて学ぶという点では、ボランティア教室での日本語学習を正式な学習と呼んでも間違いではないと思う。
(4)「普通体」文として判断したのは、名詞、動詞、また形容詞、形容動詞で終わる文である。次のような用例は分析の対象外にした。
　(BA-JK) JK: 家族は、えと、両親と、ご両親と、兄弟は
(5)ブラジル人話者の発話には方言の使用に関してもアコモデーションが見られた。
(6)「成功した」という表現には肯定的な評価は一切含意されていない。単に「切り替えが行われた」と意味している。
(7)ポルトガル語の「ネ」という談話標識と日本語の「ネ」についての考察は今後の論文で詳述する予定である。本稿では簡略に述べることに留まる。
(8)日本語の「ネ」の分類に関しては、森山(1990)、鄭(1995)、三宅(1996)を参考にした。

参考文献

鄭　相哲(1995)「ネとダロウとジャナイカ ― 確認要求形式」『日本語類義表現の文法（上）単文編』（宮島達夫・仁田義雄編）、くろしお出版.

ナカミズ・エレン(1994)「関西在住ブラジル人の言語生活」『ポルトガル語の話しことばの諸相 ― 日本語とポルトガル語との社会言語学的対照研究中間報告（1）』、国立国語研究所、1994.3.

ナカミズ・エレン(1995)「日本在住ブラジル人労働者における社会的ネットワークと日本語使用」『阪大日本語研究』8、大阪大学文学部日本語学講座.

ネウストプニーJ.V.「ネットワークの概念」8『国内の日本語教育ネットワーク作りに関する調査研究 ― 中間報告書』日本語教育学会平成８年３月.

真田信治(1996)『地域語のダイナミズム』おうふう.

三宅知宏(1996)「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89.明治書院.

Beebe, L.M. & **Zuengler**, J.(1983). "Accommodation Theory:An Explanation for Style Shifting in Second Language Dialects", In Wolfson, N.& Judd, E.(eds.) ***Sociolinguistics and Language Acquisition***, Massachusetts:Newburry House Publisher, pp.195-213.

Ellis, R.(1987)."Interlanguage Variability in Narrative Discourse:

Style Shifting in the Use of the Past Tense", In *SSLA*, 9, 1-20, Cambridge U.P..

Krashen, S. & **Scarcella**, R. (1978). "On Routines and Patterns in Language Acquisition and Performance", In ***Language Learning*** 28-2, pp. 283-300.

Marcuschi, L.A. (1986). ***Análise da Conversação***, São Paulo: Ática.

Meisel, J.M. et. al. (1981) "On determining developmental stages in natural second language acquisition", In ***Studies in Second Language Acquisition***, 3:2, pp. 111-135.

Wolfgang, K. & C. Perdue(1993). "Utterance Structure", In ***Adult Language Acquisition: cross-linguistic perspectives***, Perdue, C. (ed.), Cambridge U.P., pp. 3-40.

Tarone, E. (1985). "Variability in interlanguage use: A study of style shifting in morphology and syntax", In ***Language Learning***, 35, pp. 373-403.